

猪苗代湖疏水（安積疏水）の建設に活躍した南一郎平について

— 南は事務官であり技術者ではなかった —

日本大学工学部 正会員 藤田 龍之

A Study on Ichirobei MINAMI who contributed to ASAKA Canal

— He was not an engineer but an official —

By Tatsushi FUJITA

概 要

猪苗代湖疏水工事に於いて内務省の役人として、奈良原繁と共に活躍した南一郎平は、安積疏水の歴史を述べる人々のなかでは、主任技術者として高く評価されている。これは、彼が大分県の広瀬井手工事の成果により松方正義に見いだされ、その経験を買われて猪苗代湖疏水工事に政府派遣の役人として全工事の指揮をとったことにより、技術者として見なされたことにあるらしい。しかし、彼が広瀬井手で最もその手腕を発揮したのは金集め、つまり建設資金の手当である。また、工事そのものは彼が集めた技能集団が行い、従って、南一郎平が技術者として広瀬井手工事にたずさわったという記録は見あたらない。そこで、南一郎平の事績を調べ、彼が文官として業績を上げたが、「技術」に関しては、多少経験土木としての素養はあったものの、山田寅吉、古市公威などのように近代土木を身につけた技術者ではなく、したがって、これまでいわれているような猪苗代湖疏水の測量や設計に直接技術者として参画したことがなかったことを明らかにした。（キーワード・人物史、疏水、鉄道）

1. はじめに

猪苗代湖疏水（後に安積疏水と呼ばれ今日に至っている）の工事に重要な役割を果たし、また、那須疏水、琵琶湖疏水等にも関与した南一郎平についてその足跡を調べた。これまでに筆者は、安積疏水の基本設計についてはファン・ドールンが行い、彼の指示により山田寅吉が予算案をつくるために実施設計を行ったことを報告した。^{1)・2)}しかし、安積疏水の測量・設計について、彼が中心となり、設計は山田寅吉、測量は伊藤直記等とともに実際に行ったとする報告が多く定説となっているのが現状である。そこで、安積疏水工事を始め、広瀬井手、那須疏水、琵琶湖疏水、さらに、官を辞してから興した現業社など南一郎平が関わったことのうち、これまでにあまり述べられていなかった「現業社」について、『日本鉄道請負業史・明治篇』を中心に調べた。南一郎平の業績については広瀬井手、安積疏水に関するものが大半で、彼の「すばらしさ」を強調ものばかりで、役人を辞めてからの以後の「現業社」についての評価はほとんど見られない。そこで、「現業社」から安積疏水、広瀬井手とさか上って、彼は有能な官吏、あるいは請負の親方として部下を掌握することに優れた人物であったが、いわゆる技術者ではなかったことを明らかにする。しかし、彼は長年の経験により土木工事に関する知識は豊富であり、計算をとまなう設計は別として現地の状況を的確に判断し概略の計画を立てる力は十分に持ち合わせていたと考えられる。ここでいう技術とはあくまでも、感と経験による技術ではなく、土木工学の裏付けをもった近代技術を指している。

2. 『日本鉄道請負業史・明治篇』にある現業社

この本は、わが国の鉄道建設の発展に活躍した土木請負業について記したものであり、現在も土木業界で確固たる地位を持っている鹿島建設、大成建設、大林組などの発展の基となった事柄についても詳しく述べられている。さらに、このなかで、南一郎平が興した「現業社」について、成立のいきさつから衰退まで、また、たずさわった工事などについて詳しく載っている。そこで、「現業社」に関係する部分を引用して考察をこころみた。‘第二現業社の出現’の引用より南一郎平が井上勝鉄道局長の援助により「現業社」を興した経緯が述べられている。ただし、引用は原文通りではなく、年代順に組直してある。

ここで、『日本鉄道請負業史・明治篇』についての発刊のいきさつには、次のように述べられている。

本稿は大正五年鉄道請負業協会（現（社）土木工業協会の前々身）に於いて、鉄道請負業史として編纂に着手し爾來二十数年間に亘り数多の関係者の努力苦心により昭和十九年九月謄写版として漸く完結をみたものであります。社団法人土木工業協会沿革史によれば「大正五年工学士野沢房敬氏先ず之れに着手し、後文筆の専門家玉井磨瑳彦氏を雇入れ之れを継続し次で土木業協会（現（社）土木工業協会の前身）設立後の昭和二年六月大井憲照氏を囑託として採用しこの事業に当たらしめたが、数年の後退職されたので、昭和十年五月楠田九郎氏に依頼して新たに編纂に着手したるも幾許もなく、是亦同氏の都合で退職されてしまった。ここに於て昭和十四年三月松岡佳文氏を雇入れ、専ら編輯事務を担当せしめ、調査部の菅野忠五郎委員（当時鹿島組）及び近藤鉄太郎委員（当時有田組）の両氏に編輯委員を囑託してこれを指導監修せしめることとなり三氏は協力して、元官私鉄道監督者及び鉄道請負業者の古老数十人に就き極力資料を蒐集し其の結果昭和十八年末に於いて、明治時代に竣成せる官私設鉄道百余線の請負業史を編纂完成することが出来たが、時偶々戦時に当り物資欠乏し、用紙を得難きため謄写版とし上中下三巻（各巻約六〇〇頁）の仮綴書百五十部製本発刊したものである」とあります。以上のような経緯をもって編纂された本稿は、その内容は誠に貴重な資料に満ちているばかりでなく興味津々たるものがありますので広く頒布するために、ここに、社団法人土木工業協会の許しを得て、上梓発行する次第であります。

昭和四十二年十二月

社団法人 鉄道建設業協会

これに、南一郎平が興した「現業社」について、成立のいきさつ、たずさわった工事などについて詳しく載っているため、その部分を引用する。新旧両仮名遣いで書かれているので、そのまま引用した。

- 1) 明治十一年、内務省は殖産興業並に華士族の授産の目的を以て各府県に資産を給して盛に開墾事業を起こしたことがある。此時福島県の猪苗代湖を疏通して安積郡対面原約二千八百町歩を開墾灌流する計画が立てられ、御用掛奈良原繁が内務省より現地に出張して一切を董理し、和蘭技師「ファン・ドールン」が、設計に当り、南一郎平が工事担任を命ぜられた。……中略……

ここで、猪苗代湖疏水について、設計はオランダ技術者ファン・ドールンであり、南一郎平が工事を担当したと述べられており、南が設計したとは書かれていない。

- 2) 猪苗代湖は福島県のほぼ中央を占め、安積、耶麻、河沼、北会津の四郡に亘り、周囲十三理十九町余、面積七方里余、……中略……本工事には大小隧道三十五を数え、本水路に八ヶ所、分水路に二十七ヶ所あり、その中にて工事最も困難なりしは本水路の沼上嶺隧道であった。之は長三百二十五間余、高六尺、幅三尺五寸、勾配一間三厘であった。かくの如く大小無数の隧道穿鑿に苦心努力して首尾良く本水路分水路を完成し、明治十五年十月一日、目出度通水式が挙行された。南はこの時の苦心と経験に依り隧道工事に関しては自他共に許すものあるに至ったのである。この疏水工事は恰も大津線工事と時を同じうするを以て、この疏水隧道は鉄道隧道に比すれば十分一にも足らぬ小さなものではあるが大津線の逢坂

山隧道と共に明治維新後に於ける本邦人の手に成る隧道工事では元祖と称すべきものである。後年南麾下の者各地の鉄道工事で盛に隧道工事に従事し、「隧道南」の名を高むるに至った。

南は疏水工事のなかで、特に隧道工事で経験を積んだことが伺える。この経験を生かして、後に隧道工事を専門とする「現業社」を創設した。この後、南は猪苗代湖疏水工事を成功に導き、内務省では土木局第一部長までのぼった。しかし、彼の内務省での立場は次のようであった。

- 3) 内務省疏水課は後ち同省土木局に移管されたが当時土木局は新進工学士の淵藪にして、南の如く学歴なく実地一方の出身者は例外的の存在として次第に軽視疎外せられ、南風日に日に競はざる傾向あり、衷心快々として榮まずその志を充分に伸ぶるを得なかつた。即ち井上鉄道局長に倚り鉄道局へ移ったが、此所も大学出。洋行帰り等の逸材雲の如く、南が抬頭する余地はなかつた。
- 4) 井上局長一日彼を招き局内には人材多きも実地施工の土木業者に至りては甚だ其人に乏しきを以て君が如き實際家は寧ろ此際官を辞して野に下り発奮一土木業者となり自由手腕を揮うの意無きや否やと質した。
- 5) 南は豫てより鉄道局内亦学校出の技術者及び彼が自由に驥足を伸し得るの余地なきを覚り前途を悲観しつつある際なりしを如何にせんとして躊躇逡巡の色あり。井上局長之を察し即ち三百金を贈って之を激励した。爰に於て南は感激勇躍して官を辞し、斎藤利定等と謀り、鉄道土木業「現業社」を創立し、その専門的特色として隧道工事を標榜して業界に乗出した。当時高等官吏の進出として早川知覚の早川組創立と共に業界の一異彩として世人を刮目せしめた。かくして井上局長の配慮により早速直江津線の仕事を与えられ、斎藤利定が代人として之に當った。

ここに示したように、実務経験だけできた南にたいして大学での技術者の台頭が目ざましく、明治十四年十月二十一日の内務省職員録によると、南一郎平が45才で土木局二等属であるのに古市公威はフランス帰国後一年、27才で南より上位の御用掛・准奏任であった。また、明治17年8月15日の同職員録によると、南が土木局・権少書記官になったが、古市、山田寅吉は技術官・三等技師として内務省では最高位の技術者として遇されている。続いて宮之原誠蔵、沖野忠雄、石黒五十二と、わが国の近代土木の牽引者となった大学出の俊英の名前が並んでいる。そこで、南は井上勝局長の助言と金銭的援助により民間にうつり、トンネル工事を専門とする「現業社」を設立し、現在では大問題となろうが、井上の配慮により独立後直ちに直江津線のトンネル工事を請け負っている。

- 6) 直江津線工事の起るに及び、南は直江津・関山間の工事を担当し、坂口新田、戸草、大迫等の隧道工事に当り往時の疏水隧道工事の経験に基き大に手腕を示さんと欲したが、事志と違い、意外の困難に達し遂に逢坂山、柳ヶ瀬等の隧道工事に従事した坑夫等数名を招致して漸く完成することが出来た。

ここで、注目すべきことが書かれている。「隧道の南」とこの本に度々書かれているが、実際にはこれと裏腹に、南が引き連れてきた大分時代からの技術集団だけでは掘抜くことができず、逢坂山、柳ヶ瀬（ダイナマイト、削岩機、換気用タービンを使用）など当時最高の掘削技術を誇っていた工事関係者の協力によりやっと完成にこぎつけた。しかし、曲がりなりにも直江津線工事がうまくいったため、つぎに現業社は箱根隧道の七ヶ所のうち六ヶ所の工事を請け負った。これに関して次のように書かれている。ここでは「現業社」の特徴をよく現しているので多少長くなるが引用する。

○ 「現業社と其下請人」

- 7) 第一号（九三三呎）を除く外、他の六隧道は全部現業社南一郎平に特命された。当時現業社は直江津線の工事に成功し、一躍会社の基礎を固め、業界の第一流に伍するに至った。
- 8) 其下請には小川徳平、加来儀兵衛、児島佐左エ門等あり就中、小川、加来の兩人は当時「穴掘りの名人」と謳はれ、隧道工事にかけては天下無双の実地家であつて、南一郎平が往年豊後の広瀬堰工事を施工せし時以来の股肱である。又児島佐左衛門は本来備前児島の石屋であつて、これ又南の片腕として重きを

なし、小川、加来と伍して毫も遜色なき老練家であった。

- 9) 現業社はこの如く敏腕の下請を配下に集めていたから当時隧道工事に於いて天下彼と比肩するものなく「隧道南、鉄橋小川」と並び称せられ、盛名を斯界に馳せたのである。従つて我国未曾有の難工事たる箱根隧道を一手に掌握したのも決して偶然ではない。尚現業社が箱根隧道を引受くるに及び、その下請人中に往年の黒鍬の頭分、三谷長吉及今村浅次郎等の新鋭が新たに加わり、軒昂たる意気を以て工事に当たつたのである。然し乍らその施工方法に至つては依然旧態を脱せず掘鑿は総て手掘りに依り、爆薬は専ら鉱山用火薬を用い、殆ど文化的新鮮味を加うる所が無つた。

○ 「難工隧道と現業社の凋落」

- 10) これを以て小川徳平の下請した第二号隧道工事はその西口に於て強烈なる湧水に逢着し困窮策の出ずる所を知らず、工事ために停滯して、而も原口技師の督促は益急激を極め、現業社は周章狼狽施すの道無く、下請小川徳平と謀り只管坑夫人夫を鞭撻して過度の時間外労働を強要し、或は賞を懸けて競争せしむるなどの非常手段に訴へしため工費の冗出底止する所なく、遂に下請に於て其負担に堪えず、元請たる現業社に於て之を分担するの已む無きに至り、小川は一敗地にまみれて莫大の借財を負つて日鉄線に落ち行き、現業社も直江津線以来の利益を一隧道のために吐出し尽して尚足らず、是亦少からぬ負債を胎し社運凋落の機を醸すに至つた。

8) ~10) を検討すると、南が引き連れていた技能集団の姿が浮き彫りになってくる。つまり、広瀬井手工事に活躍した者あるいは黒鍬の親分など、確かにその経験からくる技術力は評価できることであるが、いわゆる近代技術を駆使する集団とは言いがたい。さらに、これまでに南一郎平が技術者であつたとは一言も書かれていない。彼は一般的にはくせのある人が多い技能集団をまとめる力があつた人物で、そのような人々に人望があつたと判断される。

- 11) 爾来現業社は日本鉄道や東海道線の工事に活躍したが、箱根隧道工事及横須賀線工事にて大打撃を蒙り、組織を改め、南は単に表面上の名義人たるに止り、配下の渡辺耕平、坂本長太郎、下田助次郎、小川某等が現業社名義にて活躍し、名義料として工事金の幾分を南に贈つたのである。

3. 南一郎平の履歴について

南が当時の日田県知事・松方正義に見いだされてから内務省土木局第一部長までの経歴は次のようになる。なおこれは『廣瀬井手と南一郎平傳』（都留喜一著、頸草書房、昭和30年10月）および『南尚翁傳』（奥田忠著、昭和63年3月）による。

履 歴

明治	9・10・16	補勸業寮十一等出仕
	10・1・15	任内務屬 勸農局事務取扱申付候事
	13・11・2	會計局事務取扱兼勤申付候事 等査課兼勤申付候事
	14・1・12	安積疏水掛申付候事
	14・4・20	土木局事務取扱兼勤申付候事
	14・4・28	兼會計局事務取扱申付候事
	14・7・29	安積疏水事務取扱申付候事
	14・10・28	安積疏水會計主任申付候事
	15・12・9	安積疏水掛事務取扱申付候事
	15・12・19	安積疏水掛會計主務被仰付候事
	17・1・10	疏水掛長申付候事
	17・5・16	任農商務權少書記官

- 17・ 6・ 28 任内務權少書記官 元疏水掛残務取扱申付候事
- 17・ 6・ 30 土木局勤務被仰付候事 元疏水會計整理申付候事
- 17・ 7・ 4 猪苗代湖疏水工費主務被仰付候事
- 18・ 4・ 7 土木局第一部長被仰付候事

これからの経歴をみると、事務とくに会計などの経理畑を一貫して歩いてきたことが分かり、技術畑には一度も関係していない。土木局第一部長も文官としてであったと考えるのが自然であろう。また、これまで示した文献では全て明治18年4月の土木局第一部長で終わっており、鉄道局に移ったという記録はなかった。これについて『改正官員録』（博公書院、明治19年3月）によると

○ 鐵 道 局

鐵道事務官長

技 監	從四位	井 上 勝
山 口	勲三等	赤坂葵阪町二番地

鐵道事務官

長 崎	從五位勲五等	野 田 益 晴
鹿児島	正六位	圖 師 民 嘉
		築地三丁目十一番地

權大技長五級月俸百圓		足 立 太 郎
山 口	正六位	越前堀町一丁目四番地
德 島	正七位	西 内 文 孚
山 口		内 藤 彦 介
大 分	正七位	南 一 郎 平
		駒込東片町拾番地

とあり南一郎平の名前は明治19年11月まで載っている。しかし、20年1月の『改正官員録』には記載されていない。これより南が鉄道局にいたのは事務官として、ほぼ1年間ぐらであった考えられる。特に明治19年4月18日の官員録によると、事務官と技術官がはっきりと分けられ、南は当然事務官であり、技術官には、後に猪苗代水力電気事業を起こし、ファン・ドールンの銅像建設に中心的役割をはたした「仙石貢」の名前がみられるほか、多くの学卒の技術者の名前が見られる。これらの人々の輩出が前述の『日本鉄道請負業史』にある、鉄道局長・井上勝が南一郎平に民間で活躍する場を提供して、役人を降りることを奨めたという記述に関わることがらであろう。また、同『改正官員録』には「隧道南」とならび称された「鉄橋小川」が一等技手小川勝五郎として技能者のトップとして記載されている。前述の『請負業史』によると、小川は研究熱心で技術力は高かったと述べられている。

4. 疏水完成後の『安積疏水志』にある南一郎平関係記事

明治23年8月の洪水に猪苗代湖疏水路は大きな被害を被たが、これに、南が金百圓を寄贈したことにたいして感謝状が贈られているが、その一部を紹介する。

感謝状

曩キニ猪苗代湖疏水ノ官業ニ創起スルヤ、費下ハ工事會計ノ事務ヲ監督シ雪虐風厲ヲ冒シ千辛萬艱ニ耐へ、拮据徑營數年ニ亘リ疏水ノ竣工スルニ至リ、當水利組合ノ管理スル事業トナレリ。然ルニ、客年八月ノ交ニ於ル非常ノ洪水ニ遭遇シ堤防橋梁ハ到處ニ損害ヲ蒙リ……略

明治二十四年七月

安積郡元郡山村外三十四箇村岩瀬郡仁井田村

南 一郎平殿

ここで、アンダーラインで示したように、猪苗代湖疏水工事において南は工事会計の事務を監督したとあり、設計、施工、測量など土木技術者として関係したとは書いていない。事務系の役人として活躍したようである。また、南が大久保利通の命を受け高島千畝と東北開墾地の調査に来たとき、実地測量に参加したと書かれているものもあり、さらに、ファン・ドールンが郡山にきて猪苗代湖から踏査したとき、南が測量図を示してドールンに説明したことから南は優秀な土木技術者であると、これまで一般に言われてきた。しかし、彼は松方正義に見いだされて、猪苗代湖疏水調査のため福島縣に向いていたが、明治10年に彼の郷里大分県広瀬井手に関係した暴動が起きたため家族全員を呼び寄せ、3人の子供を勉学のため東京に残し、夫人と他の子供は福島県に移り住んだ。このとき、南一郎平が南宗周、南精一両氏に宛てた手紙に彼は測量には関係してないと書いてある。一郎平の担当は取調だけで、測量に関しては本省から他に係が派遣されると言っている。これは履歴の資料とした『廣瀬井手と南一郎平傳』に詳しく出ている。

残暑未退御両家揃愈々御安厚御起居被成候御儀奉進賀候……中略……

一、兼々御頼候井手負債消却方も追々御配慮以相運御事而不耐敬謝候 爾來豊田氏より一柬に而粗御都合を承知仕候 何卒速に片付方之御一報を相待候而は時々伺可申上候處當方は取調向…未着手已前只取調なり取調の上復命更御着手筈…奈良原氏擔當小生之に次而取調のみ其外には本省より測量に人來候色々取調の部分は強大の議に付……以下略

また、同文献の「廣瀬井手の再興工事着手」には次に示すような文章が載っている。

一郎平氏は府内から歸つて再び同志をあつめ、廣瀬翁の一札を披露したところ、たれもが翁の宏量に驚ろき且つ喜んだ。……中略……

各藩の許可も得られ、諸般の準備もとのい、いよいよ工事はその年の五月からはじめられることとなった。廣瀬翁の見積りでは、總豫算三千兩の豫定で、必要に応じて出資することとし、特に翁のはからいで、元治井手の工事に従事した測量掛、佐藤彌治右衛門以下六、七名のほか、石工、小川徳兵衛以下數百人の職人と、呉崎新田開墾以來翁に知られた兒島佐左衛門などの熟練工人を、應援のためやといわれることができた。

* 小川、兒島の兩氏は廣瀬高森兩井手の工事に抜群の功勞があつて、その後一郎平氏にしたがい猪苗代湖の疏水をはじめ、いくたの工事に従事して氏の偉業を援助している。

工事に着手した當時の状況について、最近まで詳しいことは判らなかつたのだが、昭和二十七年（一九五二年）になって、偶然、南良一郎氏宅から『廣瀬井路創業日記』が発見せられ、これによってさまざまのことが判明した。……以下省略……

これから、広瀬井手工事において、南は直接工事には携わらず、彼の下に集まった技能集団により工事が遂行されたことが分かる。この時彼に協力した技能グループが後の南が関係した種々の工事、猪苗代湖疏水を始め現業社の隧道工事まで引き続き従事した。これより南一郎平は面倒見の良い人物であったと想像される。

5. 『安積事業誌』にある南一郎平について

従来、安積開拓事業に関する最も基本的な文献として知られている『安積事業誌』は、安積開拓についての種々の参考文献として引用されている。安積開拓および安積疏水開墾の福島県サイドの首導者として活躍した中條政恒については、この書を除いて彼を語ることができない。この中に南一郎平について、次のように述べられている。

第三四回 中條君、奈良原氏ト連署シテ疏水源ノ上申ヲナシ着手ヲ請ハレ、次デ疏水起功祭ヲ開成山太神宮ニ行ハレ着手ニ至リタル事。

移住士族ノ形勢已ニ前回ノ如クナレバ、少々ノ異義アルニセヨ疏水ノ事ハ到底放棄スベカラズ。疏水セザレバ遠方移住ノ士族ハ原野ノ鬼トナル外アラザルナリ。……中略……

奈良原、南二氏実地取調ノ命ヲ受ケ、三月本郡ニ出張以來、日ナラズシテ五月一四日大久保郷ノ凶變アリ。政局頓ニ一變シタレバ、本省ヨリ應援ナクニ氏ノ外一名ノ吏員モ来ラズ。南氏は測量術ナケレバ、錯雜ナル諸調査、延長ナル山野線路ノ実測等到底行ハレズ。二氏ノ困却セルコト甚シ矣。元來疏水ノ事ハ主トシテ中條君ノ精神非常ナルヨリ起リタルコトナレバ、中條君之ヲ見ルニ忍ビズ、奈良原氏ト協議シ同氏ヲ佐ケン為メ数名ノ縣屬羽根田延光、伊藤直記、大江保等（後皆本省吏員ニ転ズ）ヲ派遣シ、奈南二氏ト共ニ諸般ノ準備ニ従事シ、本省ヨリ誰レモ来ラザルモ差支ナカラシメラレタリ。故ニ山潟着手ノ當日迄ニ整備シタル幾葉ノ測量図及其規画ニ関スル諸書類ハ、南氏ト協議ニナリタルハ不待言ト雖モ、皆縣官ノ手ヲ以テ整然完備スルニ至ル。疏水式少時前、松方太輔之ヲ熟覽シ、顧ミテ伊藤卿ニ對シ準備ノ行届キ図書ノ精密ナルヲ讚美シ、南ノ手腕感心ナリト言ハレタリ。奈良原、南氏ノミニテハ到底カナル完備ノ調査ハ行ハレザルモノナルニ、上官ノ事情ニ疎ナル概ネ此ノ如シ。一坐暗ニ冷笑セリ。南氏ハ此頃迄ハ測量ヲ知ラズ。積書ヲ製スル能ハザル人ナルガ、其坐ニ在リ之ヲ聞クモ、是ハ縣官ノ尽力ナリトモ言ハレズ、黙過シタリ。人其不徳ヲ議セリ。……以下省略……と続く。

これによると、福島県に政府の役人として常駐した南について、県側の役人として緊密に接した中條の記録だけに、なまなましい南の姿が浮き彫りにされている。アンダーラインにあるように、南は全く測量を知らないので、中條は見るに忍びず、奈良原と協議して南を助けるため県属の羽根田、伊藤等の測量技術者を付けたとあり、南一郎平は単なる事務官にすぎないことを示している。

6. むすび

これまで述べてきた文献からは南一郎平が技術者であったという記述が見あたらない。しかし、『安積疏水志』の明治26年の記録に、普通水利組合から南が功労者に感謝状を贈った時の顕彰する文章の中に「湖山ノ形勢ヲ實測シ」とか「測量等悉ク奈良原氏ノ指揮ニ從ヒ」などの、多少技術者らしい記述があるだけである。このようなことが、その後、南一郎平が技術者と誤解された原因の一つになったのではないかと考えられる。いずれにしても、確証が無いのに南が技術者であるということが一人歩きをして、南一郎平は優れた技術者であるということになってしまったらしい。安積疏水に関与した技術者については、以上のことなどを考慮の上、あらためて整理し直されなければならないであろう。

参考文献

- 1) 藤田龍之、他；猪苗代湖疏水（安積疏水）に関するファン・ドールンの業績に対する検討
土木史研究、土木学会 No.11, 1991,6
- 2) 藤田龍之；猪苗代湖疏水（安積疏水）の設計における日本人技術者の役割 一山田寅吉について一
土木史研究、土木学会 No.12, 1992,6